

追悼 大沼匡之先生

中央農業総合研究センター北陸研究センター 横山宏太郎

本学会名誉会員、大沼匡之（ただゆき）先生は2010年5月18日、95歳でご逝去された。突然の訃報であった。公私ともにご縁があり、またお世話になった大先輩を偲び、略歴などをご紹介します。

先生は1915年、山形県に生まれ、東京物理学校卒業後、(財)理化学研究所に研究生として入られた。1943年に召集され、満州に渡り、1946年に復員。1947年に(財)理化学研究所に助手として戻られた。1949年、農林技官として、新庄の農業総合研究所積雪地方支所勤務となる。1960年、高田（上越市）にある北陸農業試験場に転任（定員移管）、そこで北陸農試に農業気象研究室が発足し、1975年2月の定年まで、その初代室長を務められた。

先生の雪研究の始まりは戦前の理研時代、物理学校での恩師にあたる黒田正夫先生の研究室に入られたところにさかのぼる。黒田先生のお供で、朝鮮鉄道局の委託による凍上現象の現地視察に朝鮮半島に赴かれたこともある。雪研究の本格化は新庄時代からである。当時、積雪地域においては、雪害を克服して生活向上・産業発展を図る、すなわち克雪研究が最重要課題であった。そのなかで、雪には害ばかりではなく益の面もあることを指摘し、積雪資源量の研究などを進められた点は、先生の先見性を如実に物語る。いまでこそ「利雪」という言葉が当然のように用いられるが、50年以上も前である。技術的着想にも恵まれた先生は、ピンホールカメラの原理を用いた自記積雪深計スノーレコーダー、アイソトープを用いた雪量計、神室型スノーサンプラーなどの測器を自ら開発し、またトータライザーの性能評価なども含めて、降積雪測定技術を大きく進歩させ、特に資源としての価値が大きい山地の積雪について、その特性を明らかにされた。

高田時代は、克雪研究が本格化する。まず雪による耕作期間の制限に対する手段としての融雪促



1984年、山形市、「雪国の未来社会を考える国際シンポジウム」レセプションにて（遠藤辰雄氏撮影）



1950年、積雪連合講演会（岩手県）にて。前列中央は大沼先生、その左は孫野長治、右は荘田幹夫、後列左から黒田正夫、古川 巖、及川 周、今井一郎、高橋敏男、木村幸一郎の各氏。

進では、雪面熱収支の解明を基礎として、散布資材、散布方法、散布機械を含めた融雪促進技術を確立された。また、果樹の雪害については枝折れの原因となる積雪沈降力を解明し、効率的な対策指針を策定された。農業施設の雪害に対しては、多くの実験を重ねて、施設設計基準の策定に貢献された。北陸農試の研究立ち上げでも、様々な新



大沼邸, 2008 年.

しい発想を生かされた。観測露場の地下にトンネルを設置し、積雪を攪乱せずに下から雪の下の作物を観察できる仕組みを作られた。現在は二代目のトンネルがある。また、当時ほとんど例のない落雪屋根の自宅を建設もされた。そこに「雪下ろしを楽しむため」に雪の積もる小さい屋根をわざわざつけられたのは先生らしいユーモアである。

北陸農試定年後は民間会社で研究成果を活用され、雪ダムや、泡を使った融雪抑制技術の開発に貢献された。また定年後に始められたハチの生態研究は、趣味の域を大きく超えるものだった。先生の執筆された新潟日報のコラム「晴雨計」はひろく人気があった。

半世紀以上にわたる雪研究の業績はあまたあり、また日本雪氷学会学術賞、日本農学賞をはじめ幾多の栄誉を受けられた。2003 年、高田で本会の全国大会が開かれたときには、特別功績賞を受けられたが、折悪しく体調不良で会場においでいただけなかったのは残念だった。

雪氷関係者にはあまり知られていないかもしれないが、先生は、特に東京物理学校時代には登山に熱中しておられたようである。近代登山が盛んになり、物理学校にも黒田先生を会長に仰いで、山岳会ができた。冬に夏に、穂高岳や谷川岳などにその足跡を記されている。当時のあだ名は「熊」、「熊さん」、権平長四郎さんによれば山中での敏捷な動きはその名のとおりだったとのことである。南アルプス・荒川岳の荒川本谷合宿、「荒川岳研究」計画の手書きポスターを大事に残されていた。概念図には朱色で尾根線と岩壁記号が描かれ、「会長黒田先生初登攀ニナル荒川本谷廻行研

究 クライマー、奮起、参加ヲ待ツ、申込ハ大沼」の文字が躍っている。当時は未踏峰だったエベレストの地図を壁に貼って思いを馳せられた。新庄でも高田でも山地積雪研究を展開された底流はここにあるのだろう。南極も行きたかったのだが残念だった、とのお話も聞いた。私の 2 度目の南極行き (1993-95 年) が決まったときには、たいへん喜んでくださった。

だれもが敬愛する温厚な人柄の先生であったが、その底には強い正義感と、揺るがぬ人道主義とが秘められていた。それを物語るエピソードも多い。物理学校卒業時には、兵器産業への就職を断り、理研に研究生として入られた。満州での兵役中、1945 年 8 月のソ連軍の不可侵条約破棄・侵攻により始まったあてのない逃避行の末に、山口県出身の下金馬開拓団に身を寄せ、警備役も務める。大混乱のなかでの引き揚げ手続きなど、献身的な努力の結果、他の団と合わせて 1100 人の帰還を実現された。開拓団の方々の感謝の気持ちは、終生変わることがなかった。

先生の足跡は、中村 勉さんが編集された「雪とともに一大沼匡之論文集」と「熊のあしあと」(自伝・随筆・資料集)にまとめられており、本稿も多くをそれらに依っている (2003 年刊)。

おもえば、研究では、ずっと先生の跡を辿っていたことになる。降水量計捕捉率の研究をしてみると、50 年も前に先生が手がけられていた。積雪調査の道具は先生開発の神室型スノーサンプラーである。北陸研究センターには当時の神室型が一組だけ残っており、いまでも現役で活躍している。

先生に始まる研究室は、5 代目、高見晋一室長の時代に気象資源研究室と名前が変わり、1995 年に私が 6 代目を継いだ。独立行政法人化 (2001 年) と同時に北陸農業試験場の名は消え、さらに機関の組織改革で研究室制度が廃止され (2006 年)、図らずも私が最後の室長となってしまった。

高田での先生の主治医は、私の高校の同級生だったので、ときどき様子を聞かせてくれていた。5 年前か、先生が入院されたとの電話に驚いてお見舞いに行くと意外にお元気で一安心。そこでのリハビリでずいぶん体力を回復され、草加市に移られるときには、杖はつきながらも独力でちゃんと歩いておられて、何のお手伝いも要らな

かった。その後もお元気との情報で安心し、つい訪問の機会を失したことが悔やまれる。

研究だけでなく登山、スキーや南極などでも大先輩であった大沼先生、ご縁とご恩に感謝しつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

大沼匡之（おおぬま ただゆき）名誉会員 略歴

1915 年 2 月 7 日 山形県にて出生
 1933 年 3 月 山形県立寒河江中学校卒業
 1933 年 4 月 東京物理学校（現東京理科大学）入学・同年退学
 1938 年 東京物理学校入学
 1941 年 3 月 同応用物理学部卒業
 1941 年 4 月 (財)理化学研究所真島正市研究室へ研究生として入る
 1941 年 5 月 同研究所黒田研究室発足とともに黒田研究室へ移る
 1943 年 6 月 召集。弘前の第 3 中隊・輜重隊（自動車隊）へ入隊、同月満州へ渡る
 1946 年 10 月 復員。博多上陸
 1947 年 7 月 (財)理化学研究所助手
 1948 年 10 月 同研究所（当時の名称は株式会社科学研究所）副研究員
 1949 年 1 月 農林技官、農林省農業総合研究所積雪地方支所勤務

1956 年 7 月 同研究所積雪研究室長
 1960 年 4 月 農林省北陸農業試験場へ異動。農業気象研究室長
 1974 年 1 月 国立防災科学技術センター専門委員併任
 1975 年 2 月 農水省定年退官。自然環境科学研究所取締役
 1978 年 3 月 自然環境科学研究所退職。
 (株)アルゴス顧問

学会役職

日本雪氷学会理事（1950～52 年）
 日本雪氷学会北信越支部初代支部長（1987 年）
 ほか多数

栄 誉

1968 年 日本雪氷学会学術賞「自然積雪表面での熱収支と融雪促進に関する研究」
 1976 年 日本農業気象学会賞「農耕地の融雪促進の実用化に関する研究」
 1983 年 日本農学賞および読売農学賞「農業の雪害防止に関する研究」
 1992 年 (社)日本雪氷学会功績賞「農業関連の雪の研究への多大の貢献と学会の発展に尽くした功績」
 2003 年 (社)日本雪氷学会特別功績賞「利雪克雪研究と雪氷学の発展に貢献された功績」

関連記事

本会北信越支部発行の「雪氷北信越」第 30 号、p10-18 に、論文集採択論文等題目一覧や、5 人の方の追悼文が掲載されています。